



<同志社人が母校を誇りに思える情報>

「同志社ファン・レポート」(通巻 290 号)

「教育者・新島襄」 -9-

教育者・新島襄、熊本バンド入学、人間の偉大さ

井上勝也同志社大学名誉教授



◆ 教育者 新島襄

愈々新島の教育者の面に焦点がしばられて参りました。彼は具体的にどのような教育活動を通して、彼のいう「独自一己の見識を備へ」、「自から自個の手腕を労して自己の運命を作為するが如き人物」、或いは「一国の良心とも謂ふべき人々」を育成したであらうか。

新島は福沢諭吉と違って書物を残すことをいたしませんでした。しかし多くの書簡を残しております。現在和文書簡がおおよそ 800 通、英文書簡がおおよそ 300 通『新島襄全集』の中で読むことができますのでありますが、彼の在世中妻や友人、学生に送った書簡に教育者新島襄の全体像を示す珠玉の書簡が残っております。彼はキリスト教の伝道と校長職及び大学設立のための募金運動で過労におちいり、医者から転地療養をすすめられました。彼は募金をかねて 1884 (明治 17) 年、2 度目の欧米旅行に出発いたしますが、留守中学生が放校処分を受けたことを知り、妻八重に次のような手紙を書き送っています。

五年生之林拾氏、諸方正脩氏ハ教会よりも放逐せられ候哉、此両人之取扱ハ如何相成候哉、尚教会に加はり居候は、何卒先非を悔改め、再び謝状を出し入校の手ヅルハ付キ不申候哉、市原君教会員ニ御相談有之度候、成丈け此ツマヅキヲ以テ此二人を容易に捨てざる様仕度候、私も林氏とは特に懇意になし候故、同氏の為ニ涙ヲそゝき、又度々祈り居

申候、又アトノ五六人連中ハ全く逐校せられ帰校の望ハ無之候や、残念ニ存候（『新島襄全集』3p.355）。

新島は翌 85（明治 18）年 12 月に帰国いたしまして、創立 10 周年記念式典をおこない、この席で次のような演説をしています。

往事ヲ述ヘル時〔事〕ハ実ニ数多アレトモ之ヲ除ク、又タ卒業生ノ事ヲ云ハンカ之レ亦タ数多アレトモ之ヲ除ク、諸君ト共ニ今往事ヲ追想シテ紀念シタキハ、昨年我不在中同志社ヲ放逐セラレタリシ人々ノ事ナリ、真ニ彼等ノ為メニ涙ヲ流サザルヲ得ズ、彼等ハ或ハ真道ヲ聞キ真ノ学問ヲナセシ人々ナレトモ、遂ニ放逐セラルノ事ヲナシタリ、諸君ヨ人一人ハ大切ナリ、一人ハ大切ナリ、往事ハ已ニ去レリ之ヲ如何トモスル事能ハズ、以后ハ我儕實ニ謹ム可シ（『新島襄全集』I p. 107）。

これらの手紙や演説の中に、常に学生を思い、一人一人を大切にしている教育者新島襄を見ることができるとあります。

◆熊本バンドの入学

2 年前の 1985 年、アメリカのプリンストン大学出版部から出されました『アメリカ人サムライ—L・L ジェーンズと日本』（F.G. Notehelfer, AMERICAN SAMURAI - Captain L.L. Janes and Japan）という書物を読んでいたたら、面白い個所に出会いました。熊本洋学校が廃校になりましたために、明治 9 年 9 月、30 数名の学生が同志社英学校に転校して参りました。明治 4 年に開校され、L・L ジェーンズによって 4 年或いは 3 年の厳しい教育を受けていた学生たち—彼らは後年我国のキリスト教界や言論界をリードする錚々たる人物に成長しますが、例えば小崎弘道、山崎爲徳、浮田和民、伊勢時雄、金森通倫、海老名弾正、下村孝太郎、徳富猪一郎（蘇峰）といった人々が同志社で学ぶようになりました。しかし明治 10 年、彼らは同志社に不満を抱き始めます。その理由はまだ学校としての体裁が整っていないこと、在学生の学力が低いこと、彼らが期待する高度な学問を新島や他の宣教師から学ぶことかできないこと、このような理由から、当時大阪英学校教員であったジェーンズに、同志社に失望したので東京へ行きたい、と申し出たのであります。ジェーンズは同志社を推薦した責任もあり、次のようなアドバイスをしています。即ち、東京へ行く前に、同志社の創立者になったつもりで同志社を改善する努力をしてはどうか、自分たちで新しいカリキュラムを立案し、寮の規則をつくり、学生の行為規準をつかって、新島校長と話し合いなさい、そしてそれが受け入れられなければ、東京へ行くことを考えなさい、と。学生たちはジェーンズのアドバイスに従って彼らの不満をリスト・アップして新島に提出しました。彼らが驚いたことには、新島は改善要求を受けとめ、早速改善

に着手したといます(AMERICAN SAMURAI p. 211)。

このエピソードから学生の要求に誠実な新島の一面を見る思いがいたします。

◆ **人間の偉大さ**

新島の伝記であります「新島襄の生涯と手紙」(LIFE AND LETTERS OF JOSEPH HARDY NEESIMA. 1891)に「人間の偉大さ」と題して、次のような彼の日記の一節が引用されています。

人間の偉大さは彼の学問によるものではなく、自分が公平無私になること (disinterestedness)にあるのだ。多くの学問を積んだ人間は学問のない人間よりも利己的な傾向がある。十字架上のキリストを見よう。彼は我々の模範である。彼は如何に高貴で、堂々としており、慈悲深く見えることか、自己を忘れ、真理の大目的のために惜しげもなく自己を捧げよう。本当の罪を悔い改め、謙虚になろう。私はこういったことを人間の偉大さと呼ぶのである(LIFE AND LETTERS,p.261)。■